

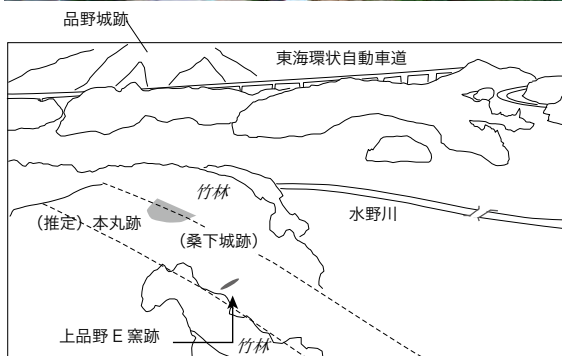
## かみしなのイーかまあと 上品野 E 窯跡 調査成果の概要

日頃は埋蔵文化財の調査・研究にご理解とご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。  
2010年4月から行っておりました上品野 E 窯跡の発掘調査が終了しましたので、その成果について概要を報告いたします。

〔調査主体〕 (公益) 愛知県教育・スポーツ振興財団      〔調査支援〕 株式会社 二友組  
愛知県埋蔵文化財センター

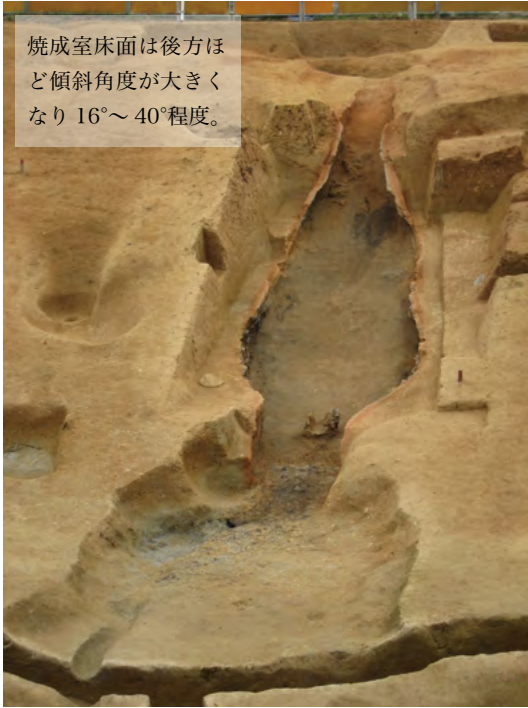
この窯跡は、国道 363 号道路改良工事に伴う桑下城跡<sup>くわしたじょうあと</sup>の発掘調査が行われた際に新たに発見されたもので、鎌倉時代の無釉の陶器碗(山茶碗<sup>やまぢやわん</sup>)と皿を焼成した窯体 1 基と作業スペースである「前庭部<sup>ぜんていぶ</sup>」を調査しました。戦国時代の桑下城が築かれるようになる 200 年ほど前の 14 世紀初め頃に操業していたと考えられます。

窯は標高約 200m の丘陵北向き斜面にあり、トンネル状にくり抜いてつくられる「窖窯<sup>あながま</sup>」と呼ばれる構造で、天井を含めた全体の形状や、工具の痕跡なども観察できる良好な資料となりました。多数の窯跡が分布する瀬戸市域の中でも、同様の製品を焼いた窯跡としてはここが北限となります。そのほかにも縄文時代の石器(剥片)や狩猟用の陥し穴<sup>おと</sup>などが見つかりました。



### 桑下城跡遠景 (北西から)

城は水野川を望む東西方向に長い丘陵部にかけて築かれています。対岸の山頂付近には(推定)品野城跡。城跡北側の土塁の縁で上品野 E 窯跡が見つかりました。



焼成室床面は後方ほど傾斜角度が大きくなり16°～40°程度。



**窯体の断面**  
地山を掘り抜いて造られた窯の天井の一部が壊れず残っていました。(赤い部分の内側は焼けて堅い壁となっています。)



長さ1.6m、深さ1.7mの穴の底に杭の痕が残る。桑下城跡の調査範囲内では、陥し穴が合計14基見つっています。



山茶碗と小皿



前庭部に集中する碗と皿製品を選別・廃棄した場所か、失敗品が多く混じる。

